

# 荷

三年 筆順 オン カ 画数 10  
に

成り立ち



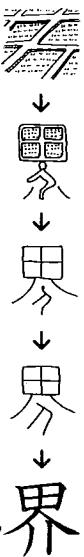
人が「にもつ」をかついだすがたをあらわし、「にもつ」といういみをあらわした「何」(2年89)という字が「なに」といういみにつかわれるようになつたため、これに「廿」をくわえて作つた「荷」が「にもつ」のいみにつかわれるようになったものです。

「荷は、廿と何との形声字で、『蓮』の本字である。蓮は『はすの実』を表した字であつたが、『はす』の意味には専ら『蓮』が用いられ、『蓮華』『蓮根』などと使われ、『荷華』『荷葉』という用法が衰えた。一方、『荷』の本字である『何』が専ら『なに』の意味に用いられるようになったため、同音の『荷』を『荷』の意味に用いるようになつたものである。」

# 界

三年 筆順 オン カ 画数 9  
ワシ カイ

成り立ち



人がもの間に「分け入る」形をあらわした「介」と「田」とを組み合わせて作つた字で、「人が田と田の間に分け入る」といういみで、「田と田の間のあぜ道」をあらわした字です。

あぜ道が田と田の「さかい」になつてゐるところから「さかい」といういみにつかわれます。**例境界**。また、あぜ道によつて田が「かぎられ」ているところから「限られたところ(はんい)」といふいみにつかわれます。**例視界、財界、政界**。

三年

二六四

使い方

▽ぼくが電車の中で、させきにすわつていると、大きな荷物を下げたおばあさんが、電車にのつて来ました。大きな荷物を下げたかつこうが、大へんそうに見えたので、すぐせきをゆずりました。おばあさんは、あせをふきながら、にこにこして、「どうもありがとう。たすかりますよ」といました。ぼくも、いいことをしたと思つて、うれしくなりました。

▽おかあさんが、P.T.A.のやくいんになりました。さいしょ、おかあさんは、「わたしには、荷がおもすぎるわ」といつて、しぶつていたのですが、みんなにすすめられて、しかたなく、やくいんになつたのです。

熟語例

▽荷物(もつてはこぶもの)荷物をもつてはこぶのは、めんどうですから、「やつかいなもの」といういみにも、つかわれことがあります。「あの子をつれていくと、お荷物になるから、いやだなあ」などといふうに、つかわれます。

▽出荷(荷物をはこび出すこと。対「入荷」)

使い方

▽山にのぼつて、きりにとりかこまれたことがあります。ある時には、こいきりがすつかりまわりをとりかかる線。あるものと、ほかのものをへだてる線)で、なにも見えなくなるのです。が、つぎのしゆん間に、それからはみ出さないように、とりきめをしていきます。

▽境界線(あるものと、ほかのあるものとのさかいになる線。あるものと、ほかのものをへだてる線)は、さあつときりが晴れて、視界が広がるのです。それは、とてもおもしろく、ふしがでした。

熟語例

▽視界(目で見えるはんい)  
▽財界(財政をとりあつかつてゐる社会。たとえば実業家や金融業者などをいいます。「経済界」といつても同じことです。)  
▽政界(政治の世界。政治にかんけいする人たちの社会。「政界の大立者」などといふと、「政治の社会で一ぱん重んじられている人」といういみになります。)

二六五